2025年11月発行
茨木御堂
第304号

茨木御堂

真宗大谷派
茨木別院
（輪番　河原　恵）
〒567-0817　茨木市別院町3-31
TEL（072）622-2903
FAX（072）625-9445

南無阿弥陀仏　人と生まれたことの意味をたずねていこう　みんなに願いがかけられている

茨木別院令和の大改修

遇斯光のゆえなれば　一切の業繫も　のぞこりぬ　畢竟依を帰命せよ

（『真宗聖典』第二版 五七一頁）

このお言葉は、正信偈の後の五首目の御和讃にある、

清浄光明ならびなし　遇斯光のゆえなれば
一切の業繫ものぞこりぬ　畢竟依を帰命せよ

と、阿弥陀様の清浄光のはたらきを讃嘆するお言葉です。

今から八年前に、山科別院の暁天講座に出講された古田和弘先生（前大谷大学教授・前九州大谷短期大学学長）が、『畢竟依を帰命せよ』と題してお話しされました。

熊本の山奥のお寺の御門徒さんの話です。夫を脳梗塞で亡くし、息子さんを膵臓癌で亡くし、その知らせを聞いて車で病院へ駆けつけようとしたお嫁さんと二人のお孫さんを亡くしたおばあさんの話です。古田先生が一人になったおばあさんを案じて「おばあさん、これからどうするのですか」と問われました。するとおばあさんは、「私は、おまかせしとりますけんね」と答えられました。私たちには業繫がありますから、自分へのこだわりがあります。我々は自分の思いをからめずに考えることも、感じることもできません。語ることも、行動することもできません。

そのことを親鸞聖人はよく知っておられて、「畢竟依を帰命せよ」とおっしゃいました。「最後のよりどころは、あなたのこだわりではありませんよ」「業繫をのぞいて畢竟依である如来の本願におまかせして、お念仏に生きてください」と呼びかけておられるのです。

事実を―如来の本願力回向を―いただいて、それに素直に向き合っていく。事実を、自分の思い通りにしたいという心で見るのではなく、阿弥陀様のはたらきに、呼びかけに素直にしたがう。素直にまかせる。これが信心であると思うのです。

南無阿弥陀仏　輪番　河原　恵

茨木別院関連ホームページ
茨木別院 ➡ ibarakibetsuin.or.jp
いばらき大谷学園 ➡ ibarakibetsuin.or.jp/kids/

真宗教団連合ホームページ
http://www.shin.gr.jp/
真宗教団連合　検索

茨木別院　月行事ご案内

十一月

●教如上人御命日・五日講
・日時　五日（水）午後一時半より
・会場　別院会館
・講師　加藤　恵　師

●報恩講
・日時　十四日（金）～十六日（日）

●親鸞聖人御命日・二十八日講
・日時　二十八日（金）午後一時半より
・会場　別院会館
・講師　茨木別院輪番

十二月

●教如上人御命日・五日講
・日時　五日（金）午後一時半より
・会場　別院会館
・講師　加藤　恵　師

●除夜の鐘・修正会
・日時　三十一日（水）午後十一時半より
・除夜の鐘終了後修正会

※十一月十四日～十六日の月忌参りはお休みさせていただきます。
※十二月の二十八日講は休講となります。

2025年度
茨木別院
報恩講
11月14日→16日

講師　宮下（みやした）　晴輝（せいき）　師
［大谷大学名誉教授］

会場　茨木別院会館

講題「仏教における信仰の問題」

●本堂修復工事中のため法要は内勤めとなります。
●報恩講お勤めに併せて本堂屋根工事現場見学会を開催予定。

日	時　間	報恩講日程	備　考
14日（金）	13：30	逮夜のお勤め 御伝鈔拝読	逮夜法話 / 宮下 晴輝　師 法話終了後 / 工事現場見学会開催 見学会開催後 / 御伝鈔拝読
15日（土）	7：30	晨朝のお勤め	
	10：30	日中のお勤め	日中法話 / 宮下 晴輝　師 法話終了後 / 工事現場見学会開催
	13：30	結願逮夜のお勤め 御俗姓拝読	結願逮夜法話 / 宮下 晴輝　師 法話終了後 / 工事現場見学会開催
16日（日）	7：30	結願晨朝のお勤め	
	10：30	結願日中のお勤め	結願日中法話 / 宮下 晴輝　師 法話終了後 / 工事現場見学会開催

園の子どもたちへ

いばらき大谷学園

●秋の遠足・動物村

九月の最終週に、幼児組さんは秋の遠足で『神戸どうぶつ王国』に行ってきました！

あまり大きな動物はいませんでしたが、近くで見ることが出来る動物が多く、檻が無いところもあって間近でたくさんの動物を見ることが出来ました。檻の無いエリアではカピバラや動かない鳥・ハシビロコウもいて、子どもたちのすぐそばまでやってきてくれて、大満足の様子でした。そのなかでも『ペリカンフライト』はあまり他では見られないイベントだったこともあり、ペリカンが目の前を飛ぶ姿を見て、子どもたちは大興奮でした。また機会があれば『神戸どうぶつ王国』へ行ってみてください。

そして十月の始めには、全園児対象の『動物村』が園にやってきました！

毎年来てもらっていますが、冬に来てもらうことが多く、今年は秋ということで、いつもと違う動物が来ていました。リスザル・蛇・亀・猫と冬が苦手そうな動物たちをはじめ、おなじみのポニーや七面鳥・ウサギ・モルモット・ハツカネズミ・ニワトリ・アヒル・犬・羊・ヤギ、たくさん来てくれました。この日のためにみんなが持ってきてくれた野菜や果物をあげたり、優しく抱っこしたりしてふれあい、楽しい時間を過ごしました。ヤギさんと羊さんはとても食いしん坊でもっとちょうだい！と催促して子どもたちに近寄ってきていました。乳児組さんや年少さんは自分たちより大きい動物にドキドキしていましたが、ポニーの背中に乗り、動物とふれあうことの多い秋を満喫した子どもたちでした。

木村　千夏

うたって・たたいて・うごいて〝心と体を育む音楽の力〟

保育園教諭　柴田　祐子

園での音楽の時間。それは、子どもたちが一番生き生きと輝く瞬間のひとつです。毎日の生活の中に、朝の会では季節の歌をうたったり、リトミックで体を動かしたり、楽器遊びなど音楽に触れることがあり、音楽が自然と溶け込んでいます。リズムに合わせて体を動かすことで運動能力やリズム感、表現力が育まれます。歌の歌詞を通じて語彙が増え、わらべうたや童謡は言葉の繰り返しが多く、言葉の発達に良い影響を与えます。子どもたちはいつも歌を口ずさみ、手を叩き、体を揺らして楽しそうに動いていると、自然と笑顔が溢れています。楽器がなくても手や足、声そのものが立派な音楽になっています。みんなでうたえば一体感が生まれています。楽しく体を動かし、思いきり表現することで、子どもたちの心も解きほぐし、安心感や喜びを感じる不思議な力もあります。毎日、子どもたちが笑顔で歌をうたったり、元気に体を動かす姿を見ると、私も嬉しい気持ちでいっぱいになります。日々の園での生活の中で小さな音楽の時間。子どもたちは、毎日の遊びや触れ合いの中で、たくさんのことを感じ、学び、少しずつ体も大きく育っています。毎日見せてくれる笑顔や「できた！」という喜びの声に、元気をもらっています。遊びの中で身につくリズム感や表現力、そして「楽しい」「嬉しい」と感じる心。子ども一人ひとりの成長、豊かな感性や人とつながる力が育まれるように、これからも、子どもたちの「たのしい！」や「やってみたい！」という気持ちを大切にしながら、音楽を通して日々の保育を積み重ねて行きたいと思います。

茨木別院報恩講
二〇二四（令和六）年十一月十六日　結願日中法話

「弥陀の名号となえつつ」

講師：藤原　智　師
（真宗大谷派教学研究所　研究員（当時））

みなさん、こんにちは。京都の本山の教学研究所で研究員（当時）をしております藤原智(ふじわらさとる)と申します。今日は茨木別院さまからお声がけを頂戴し、報恩講(ほうおんこう)でお話しをさせていただくことになりました。ここは本当に立派なお堂です。先ほどご輪番(りんばん)よりお聞きしたのですが、この茨木別院の本堂は建立からおよそ二五〇年が経つそうです。それで来年から二年間の改修工事に入ることになり、このお堂で報恩講をお勤めするのはしばらく間が空くとのことです。そのような改修前の最後の報恩講という機会をいただき、大変恐縮しております。

昨年の茨木別院の報恩講では延塚知道(のぶつかともみち)先生がお話されました。私も大学院で延塚先生のもとで学ばせてもらいました。その昨年の延塚先生のご法話が、東本願寺出版から『生も死も引き受けて』という書籍になって出版されています。先生の奥様がご病気になり、その最後の時間を生も死もいただいたものであると引き受けていく、最後の時間を仏法とともにいただいていかれたお話でした。

生と死、「生死(しょうじ)」ということが仏道の根本関心です。我々は普段は、そういうことをあまり考えません。身近なところでことが起こらなければ意識しない、という鈍感(どんかん)な生き方をしています。そのような我々に、本当に考えるべきことは「生死」なのだと教えられています。親鸞聖人(しんらんしょうにん)の奥様である恵信尼公(えしんにこう)が、娘の覚信尼公(かくしんにこう)に送られたお手紙があります。その中に、親鸞聖人が法然上人(ほうねんしょうにん)と出遇い、お念仏の教えに本当にうなずいたことについて語り伝えようとしている言葉があります。「ただ、後世(ごせ)の事は、善(よ)き人にも悪(あ)しきにも、同じように、生死出(しょうじい)ずべきみちをば、ただ一筋(ひとすじ)に仰(おお)せられ候(そうら)いしをうけ給(たま)わりさだめて候(そうら)いしかば」というものです。親鸞聖人だけでなく様々な人々、社会的によき人と呼ばれる人も、あしき人と見下されるような人も、様々な立場の人たちが法然上人のもとに集まって、同じご説法を聞いた。その法然上人は何を伝えようとしていたのか。それが「生死出(しょうじい)ずべき道(みち)」、生死を超える道をお説きになったのです。仏道の根本関心は、この生死の迷いを超えていくことにあります。もちろん、それだけではなく、そこから発生する様々な問題に対して、仏教は広がりをもって語っていきます。ただ、根本にあるのは、生死の中で苦悩

し、悩み、悲しみをいだく。その生死、具体的にはお釈迦さまの出家の動機である老・病・死です。年老い、病気になり、死んでいかなければならない、そういう身を我々は誰もが生きている。普段はあまり考えないけれども、いざ自分のこととなれば、そのことに悩み苦しみ、そしてそれを超える道が分からない。この苦悩を超えていける道があるのか。その道を求め、尋ねて、そしてそれを超える道があるとうなずき、人々に語っていこうとした。そうした根本関心に促された歩みの全体が仏道であると思います。

　ただ、生死を出ずるとか、生死の苦しみから離れる、超えると仏教ではよく言いますが、実際はどういうことであるのか、なかなか分かりません。生まれ、やがて死んでいかなければならないこの身を生きている、その生死を超えていくとはどういうことか。それは決して死なないようになるといったことではないでしょう。老・病・死を超えていくということは、老・病・死しないようになるということではない。病気になって苦しいというとき、病院に行って治療して治ったとすると、目の前の病気の苦しみから離れたとは言えます。しかしそれは、老・病・死がいつやってくるか分からない身を生きている、という事実から離れたわけではありません。生死を出ずるといっても、年老いたり病気になったりしなくなるということではないわけです。

　また、私たちは死ということに対して大変深い悲しみをもちます。身近な人の死ということに遇った時、大変な悲しみをもったという経験は誰にでもあると思います。そういう時に我々は思うことがあるのです、こんな悲しみなんてなければいいのに、と。では、悲しまなくなったらそれが救いなのかというと、そうではないと思います。もしそうなったら、それはただ鈍感になった、鈍くなっただけなのかもしれません。そうすると、生死を超えるというのは、人間は死ぬものだからと達観して通り過ぎてしまえるような人間になるということではないのでしょう。あるいは、親しい人と別れた悲しみというのは、それだけその人との深い関係をもっていたということです。その悲しみがなくなったのなら、それはその関係自体を忘れてなくしてしまったかのような気がします。そんなことは、きっと誰も望んでいません。

　生死を超える、これが仏道の根本関心だと申しますが、それは死なくなる、病気にならなくなるということでもないし、病気や死について苦しみを感じなくなるということでもない。では、我々がどうしても感じてしまう悩みや苦しみに対してどうありたいのか。それは延塚先生のご法話の題にありましたように、老・病・死を自分自身のかけがえのない人生の事実として引き受けていけるようになりたい、ということではないでしょうか。身近な人が亡くなった、あるいは自分も死んでいかなければならない、

そこに本当に悲しみを感じ、苦悩を感じる。でもその悲しみをなくしてしまいたいわけではない。その悲しみを自分自身の大事な人生として受け止められるようになりたい。死んだ人が生き返ったりとか、死を考えないでいたいとか、そういうことではなく、死の事実を引き受けていけるものになりたい。けれども大変な悲しみに襲われた時、我々はそこに打ちひしがれてしまう、立ち上がれなくなってしまう。そして、ただみじめな悲しさだけが残る。そういうものになるのではなくて、大変なつらい悲しい思いをもつけれども、それを大事な人生の事実として引き受けれるようになっていきたい。それが生死の苦を超えていく道になっていくのではないかと思います。しかし、私の思いからするとそうはなりません。私が悲しみや苦しみに襲われる中で、自分の心をしっかりと支えて、もち上げて、立ち上がっていこうとしても、自分では受け止めきれない。そういう弱さが我々にはあります。

先ほど見たように、法然上人は「生死出ずべき道」を説いておられました。その法然上人の教えを、親鸞聖人は「ただ念仏して弥陀にたすけらまいらすべし」（『歎異抄』第二条）と伝えておれます。みなさんも何度も聞いている言葉だと思います。親鸞聖人は、この法然上人の教えをいただいて信じる以外に別の子細はない、とおっしゃられています。阿弥陀仏は「念仏するものは、どんなものでも必ず浄土にむかえとろう」という願いを起こされ、その願いが今我々に届けられている。そのお心を信じ念仏して、阿弥陀仏にたすけられなさいと言われている。我々には、人生の悩みや苦しみを引き受けて立ち上がっていく力が出てこない。しかし、その「どうしてこんな人生に」と言ってしまう私のこの思いを受け止めて、その人生は決して空しく過ぎていくものではないと呼びかけてくれるお心がある。我々からすると、自分や他人の人生を評価して、あんな人生、こんな人生と思ってしまい、心が暗くなってしまう。どんな人生でも引き受けていこうと思っても、力が湧いてこなくなる。けれどもそんな自分を見据え、どんな人生であっても空しく過ぎていくのではないと呼びかけ続けてくれるお心が我々にはついている。この人生を良い人生だとは言えないかもしれないけれども、かけがえのないものとして受け止めてくれるお心が、お念仏に託されて我々に届けられている。

我々は、ただお念仏しなさいと教えられています。お念仏するというのは、仏さまの存在・お心を、その名を称えることを通して思い出すということです。いつでも誰にでもできる行として、我々にはお念仏が届けられている。どんな時でもお念仏を通して、仏さまのお心が私たちに寄り添っているということを我々は思い出していくわけです。そこに、苦悩多き人生を引き受けるものを見出すのです。

今日の講題にあげました言葉は、親鸞聖人が作られた次のご和讃にあります。

弥陀の名号となえつつ　信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして　仏恩報ずるおもいあり

何か仏教というものにうなずいて、あるいは阿弥陀仏の教えにうなずいて念仏するということではありません。「弥陀の名号となえつつ 信心まことにうる」というように、我々はお念仏をいただいて、お念仏を称えることの中からうなずきをいただくのです。ある先生は、お念仏に育てられなさいとおっしゃいました。いつでも誰でも、どんな状況になっても称えられるのがお念仏です。いつでもどこでも誰も決して見捨てられることがない、その心を象徴しているのが「南無阿弥陀仏」と称えるということです。我々はその南無阿弥陀仏というお念仏を称えることを通して、いつでもどこでも我々を見そなわし、呼びかけ続けている仏さまのお心を思い出すことができる。南無阿弥陀仏と称えることを通して、そこにある仏さまのお心を我々は少しずつ聞いていく。うなずけたら念仏するという人がいますが、そういうことはなかなかありません。こうしてみんなで集まって、一緒にお勤めをして、お念仏をして、そういう中で仏さまのお心があるとなんとなく分かってくる。そういう歩みがこの生死の苦しみを超えていく道となっていくのです。

親鸞聖人の主著である『教行信証』という書物の中に「念仏衆生は、横超の金剛心を窮むるが故に、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す」という言葉があります。難しい言葉ですが、「念仏衆生」とは、我々が念仏を称えるということです。「横超の金剛心を窮むる」とは、仏さまのお心をいただくということです。私たちはお念仏を称えることを通して、仏さまのお心をいただく。これは先ほどのご和讃の「弥陀の名号となえつつ 信心まことにうるひとは」と同じことですね。お念仏を通して我々は仏さまの心をいただいていく、その歩みが「臨終一念の夕、大般涅槃を超証す」という。これも難しい言葉ですが、「大般涅槃」とはお釈迦さまがその生涯を終えられたことを指す言葉です。お釈迦さまがお覚りを得られて、八十年の人生をまっとうしていかれた姿が大般涅槃です。そのお釈迦さまと同じように、我々の人生もお念仏をいただくことによって、お念仏を称え、そこに仏さまのお心を聞き、お育ていただくことを通して、この人生最後の時にあって人生をまっとうしたと言い切れる、そういう歩みとなっていくということです。自分自身では受け止められないような生死の苦悩を、仏さまがともに引き受けようとしてくださる、そのお心を大

切に聞き抜いていくことが本当に人生をまっとうしたと言い切れる歩みとなっていく。その確信を親鸞聖人はここで表明してくださったのです。

お念仏をいただいたら一足飛びに生死の苦悩を超えたと言えるわけではありません。我々はどこまでも苦しみを抱えているのが実際です。仏さまがすくいとりたいとご覧になった人を「凡夫」と言います。その凡夫について親鸞聖人は「われらなり」と言い、さらに「「凡夫」というは、無明煩悩われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころ、おおく、ひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえず」（『一念多念文意』）とおっしゃっています。我々には様々な思い・煩悩が湧いてくる。「なんであの人が」というような、客観的に見ればそんなに腹を立てなくてもいいことなのに腹を立ててしまう。「もっとこうなったらいいのに」、「なんで私だけがこんな目に」というような思いが湧いてくる。こうして私自身を振り回す煩悩のこころは臨終の一念まで止まらず、消えず、絶ずだというのです。しかし、止まらず、消えず、絶えずという身であることは、仏さまがご覧になっている私の姿です。生涯、臨終の一念その時まで私の思いはやまないけれど、しかしその私を仏さまは最後まで見捨てずにお心を寄せ続けてくださる。煩悩がなくなって救われるのではないのです。臨終の一念までそういう思いを抱える私であるということを、仏さまのお心に聞いていくところに、この生涯全体が本当に引き受けていけるものとなっていくのではないかと思います。

最後に、そういう歩みをされた先輩の言葉として、岡本正雄さんという方の言葉を紹介します。岡本さんは、私が身を置くお寺にご縁のあった方で、様々な法座に足を運ばれて、生涯を聴聞に生きていかれた方です。体調を崩され亡くなっていかれますが、その最後の日に手帳に次の言葉を書かれました。

「死にとうない、南無阿弥陀仏」
「死にとうないけど、心は明るい」

人の最後の言葉を勝手にあれこれ解釈するのはおこがましい気がしますが、一つの受け止めとしてお話します。おそらく最初に書かれた「死にとうない」という言葉は、非常に素直な思いなのでしょう。自分の体は日に日に弱っていき、もういのちを終えていくことは分かっている。長く聴聞されていたからこそ、分かっておられたと思います。仏教は「生死無常」であると言います。いずれ必ず死んでいく身であると、そういうことはずっと聞いて

きて、よくよくそのことは知っている。けれども本当にその時になって出てくるのは「死にとうない」、それで心が暗くなっていく。しかし、ずっと聴聞し続けてこられたからこそ、次に「南無阿弥陀仏」とお念仏が出てくる。「死にとうない」という気持ちで心の中が暗く一杯になったところに「南無阿弥陀仏」が出てくる。そこに「死にとうない」の一言が変わります、「死にとうないけど、心は明るい」と。「死にとうない」という気持ちは変わることはない。しかしそれだけでなく、心が真っ暗になるけれども、そこに今までずっといただいてきた「南無阿弥陀仏」が出てくる。その「南無阿弥陀仏」には、仏さまのお心が託されている。どんな人生になろうとも決して空しく過ぎゆくものではないと我々に呼びかけ、寄り添い、支えようとするお心が我々についている。そのことが「南無阿弥陀仏」を通して、自分にもう一度出てくる。この時に、「死にとうない」という思いを抱えた私とは、聴聞のなかで「煩悩具足の凡夫」だとずっと聞いてきた姿をまさに今しているな、とうなずかれるのでしょう。これが私のいのちの事実である。それは決して単に悲嘆すべきもの、空しいものではなくて、これが私の人生であり、それがそのまま損なわれることのないいのちの事実である。「南無阿弥陀仏」の言葉を通して、そうご覧になっている仏さまのお心を思い出す。その時に、単に真っ暗な心ではなく、そこに「死にとうないけど、心は明るい」という開けが出てくる。「死にとうない」、でもそれが私の姿であり、それを見捨てないと仏さまは言ってくださるのであれば、「死にとうない」という気持ちのままでも、暗く押しつぶされることのない開けをもったいのちがいただける。こういううなずきを伝えたいと、最後に手帳に書かれたのではないかと思います。それが「生死を出ずる道を確かに歩んでいる」と言いうるのではないかと思い、我々の先輩の言葉として紹介させていただきました。

生死を出ずるというのが仏道の根本関心であり、最後の問題になると思います。その生死を超えていく道を親鸞聖人は法然上人からいただき、親鸞聖人自身が確かめられ、教えとして伝えてくださり、それが今我々に届けられている。このことをあらためて私たち自身が確かめていかなければなりません。今日は報恩講ですが、報恩とは恩徳に報いるということです。生死を出ずるという関心をもって親鸞聖人は道を求められ、言葉を遺してくださった。それが我々に対する大切な恩徳であると知り、我々も自身の苦悩多き人生を引き受けていく。そこから、自分がいただいた言葉をまた人に伝えていく。そういう恩徳に応答する生き方をしているかどうか、我々一人ひとりが確かめ直していくのが報恩講ではないかと思います。ご静聴くださり、ありがとうございました。

（完）

〈合祀納骨案内〉

合祀墓を増設いたしました。八月より合祀納骨の受付を再開しております。詳細については茨木別院事務所までお問い合せください。

■特別納骨
納骨料：五〇万円

■個別納骨
納骨料：三〇万円～一〇万円
※法名プレート刻銘料三万三千円が別途必要となります。

■合同納骨
納骨料：七万円

●茨木別院事務所
☎〇七二―六二二―二九〇三

敬弔

ご生前のご遺徳を偲び、
謹んで哀悼の意を表します。(敬称略)

―記―

●法名　浄光院釋宗義
俗名　片岸 義夫　九十六歳

●法名　釋尼浄江
俗名　谷口 初江　九十三歳

●法名　釋尼慈光
俗名　神宮司 光子　八十九歳

編集後記

今年の報恩講は、本堂の改修工事中のため、会館仏間にて茨木別院輪番・列座による内勤めの法要といたします。日程は例年通りで勤修いたします。

また、今年は法要後に、本堂屋根の足場に上がる見学会を実施いたします。普段は近くで見ることのできない本堂の屋根を、間近にご覧いただく貴重な機会です、是非たくさんの方に見学いただければと思います。

なお、改修工事は来年十一月ごろまで続く予定です。ご不便をおかけしますが、何卒ご理解とお参りのほどをお願い申し上げます。

竹内 明人

―生花・供花・けいこ花―
株式会社 花廣
茨木市大手町一二‐八
☎(〇七二)六二二‐二四〇二